

ブラインドサッカーによる交流のアンケート調査

Questionnaire survey of interaction through the Blind Soccer

横尾 智治（筑波大学附属駒場中高等学校）

1 緒言

共生社会の実現のためには、障害のある人と障害のない人が互いに理解し、支えあっていくことが不可欠である。学校教育現場においては、子供同士のふれあいを通じて豊かな人間性をはぐくむことを目的とする交流や、教科等のねらいの達成を目的とする共同学習を通して相互理解を図ることがきわめて重要になる。小・中学校等や特別支援学校の学習指導要領においては、障害のある子どもとない子どもが活動を共にする機会を積極的に設けるように示されている。また、障害者基本法においては、一部改正により、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって、その相互理解を促進しなければならない旨が規定された。

一方、相互理解や交流にスポーツは適している。スポーツを行う中で選手は強い達成感を得たり、技能が習熟するにつれて、自分の体や心の成長を感じることができ、仲間との連帯感や絆を築くことができる。またスポーツを通じて対戦相手に敬意を払い、尊重し理解することができる。

障害者スポーツは1948年にパラリンピックの発祥となるスポーツフェスティバルが開催され、それ以降発展し続けてきている。ブラインドサッカーはパラリンピックアテネ大会よりパラリンピック正式競技となった（長澤・入口、2009）。サッカーは4年ごとにワールドカップ大会が行われ世界各国で競われる国際的に人気のあるスポーツであるがブラインドサッカーも同じく魅力あるスポーツである。

視覚障害者と健常者の交流や相互理解のために障害者スポーツの一つであるブラインドサッカーが適していると考えられる。

ブラインドサッカーでは健常者と視覚障害者が同じチームでプレーすることができお互いに全力でプレーできる。視覚障害者と健常者の両者が同じコートで接触も可能なルールで全力でプレーする競技はまれである。健常者はブラインドサッカーを体験することで障害者との関わり方、障害者の理解等を学ぶことができる。ブラインドサッカーの普及と発展により健常者と視覚障害者の交流は活発に

できる。しかし、現在ブラインドサッカーに関する研究調査報告はきわめて少ない。そこでブラインドサッカーを体験することにより、体験者がどのように感じるかを把握しブラインドサッカーを普及、発展させる要因を明らかにしたい。

本研究は、ブラインドサッカーによるT視覚特別支援学校とT大学、T高等学校の3校の交流を通して参加者がどのように感じるか検討した。

2 方法

2.1 準備

本研究を実施する準備としてブラインドサッカーのいくつかの企画を実施した。2009年3月15日にT視覚特別支援学校グラウンドでT大学サッカー部と、T視覚特別支援学校寄宿舎のブラインドサッカーチームとのサッカー交流が実施された。2009年3月28日にT大学社会貢献プロジェクトの公開講座としてT中高等学校でブラインドサッカーの体験講座を実施した。公開講座は日本視覚障害者サッカー協会とT視覚特別支援学校から数名の指導者を招き実施した。参加者は区立中学校サッカー部員9名と引率顧問2名とT中学校サッカー部員20名とその顧問1名であった。実施内容はアイマスクを着けて目が見えない状態での移動、音源入りのボールのドリブル、シュート、目が見えない状態で声を頼りにしたグループ集合ゲームであった。参加者の生徒はブラインドサッカー選手の動きをみて、「目が見えているかのようなプレーで驚いた」「目に障害があっても、サッカーは目が見える人と同様にできた」「目が見えるかのようなプレーで五感がすごいんだなと思った」等の感想を述べた。また他には「声や音を聞いてそれを頼りに行動に移すのが難しかった」「サッカーよりもコミュニケーションをとるのが大変で難しいと思った。どのような声を発するのかとても頭を使う」「目が見えないと不便。障害がある人の気持ちがあった」等の感想があった。本研究はこれらの内容を基に計画された。

2.2 日時、場所、参加者

2009年8月29日、都内のフットサル場で実施した。参加者はT高校サッカー部20名、T大学サッカー部10名、T視覚特別支援学校ブラインドサッカーチーム8名であった。T視覚特別支援学校ブラインドサッカーチームの8名の視力は矯正視力で0.1以下であった。

2.3 交流の内容

参加者は12人程のグループを3グループづくり、手をつないで円をつくった。そして自己紹介をした後に、目隠しのためアイマスクを着け、名前を呼び合いながらパス交換を行った。その後目隠しをした状態でペナルティキック地点からのシュート、ドリブルシュートを行った。次に健常者チームは見えている状態でプレーし、ブラインドチームと健常者チームとの試合を行った。次にブラインドチームに健常者チームの選手が1、2名ずつ順番に交替しながら参加し試合を行った。その際、健常者はアイマスクを装着してプレーした。次にT高校とT大学のフットサルゲームを行った。その際、プレーヤー全員はアイマスクを装着せずフットサルと同じルールでプレーした。

最後にT大学とT高校の合同チームとレッドロケッツとの「B2・B3」ルールによるフットサルゲームを行った。「B2・B3」ルールのサッカーは弱視と呼ばれる人達のルールで、低視力や狭い視野の人達が、残存する視力を活かしフットサルに近いルールで競技するものである（日本視覚障害者サッカー協会、2006）。その際、健常者は全員アイマスクを装着せず目が見える状態でプレーした。交流後は参加者にアンケート調査を実施した。

2.4 アンケート調査

公開講座で実施したアンケートの結果を参考に15の質問項目を作成した。

質問項目の15項目は次の通りである。「1ブラインドサッカーは楽しい」「2また機会があればブラインドサッカーをやりたい」「3コミュニケーション能力が高まる」「4普段より声を出してコミュニケーションをとった」「5ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった」「6ブラインドサッカーは闘争心がわく」「7視覚（光・影）をよく使った」「8聴覚をよく使った」「9臭覚をよく使った」「10触覚をよく使った」「11今までにない感覚を感じた」「12ブラインドサッカーは体力的に疲れる」「13ブラインドサッカーは精神的に疲れる」「14ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた」「15障害者スポーツに興味を持った」

回答の選択肢は「あてはまる」、「ややあてはまる」、「どちらでもない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」の5段階に分けた。

アンケートの結果を健常者と障害者の2群に分け質問

項目における平均値の差を検討した。PASW Statistics 18を用いて対応のないt検定を行った。

また、アンケートの結果を所属団体の3群に分け質問項目における平均値の差を検討した。PASW Statistics 18を用いて1要因の分散分析とTukeyの多重比較検定を行った。

3 結果

3.1 質問項目値

回答の選択肢の「あてはまる」を5、「ややあてはまる」を4、「どちらでもない」を3、「あまりあてはまらない」を2、「あてはまらない」を1として数値化した。

表1に視覚障害者と健常者のアンケートの対応のないt検定の結果を示した。

質問項目3, 7, 9, 11, 12, 13において2群間に有意な差がみられた。（ $p < 0.05$ ）

表2に視覚障害者と健常者のアンケートの平均値を示した。質問項目にたいして「あてはまる」という度合いが強いことを意味する項目値4より高い項目は、健常者は、質問項目2, 3, 8, 11, 13であった。同じく視覚障害者において項目値4より高い項目は、質問項目1, 2, 3, 5, 8, 14, 15であった。

図1から図15までアンケート項目の回答の度数分布をグラフで示した。

表3に3団体のアンケートの平均値の1要因の分散分析の結果を示した。

質問項目2, 7, 11, 12, 13, 15において3群間に有意な差がみられた。

表4から表9に3団体のアンケートの平均値の1要因の分散分析の結果から有意差が見られた項目の多重比較検定の結果を示した。

質問項目2ではT視覚特別支援学校とT高校の間に有意差が見られた。

質問項目7ではT視覚特別支援学校とT高校の間に有意差が見られた。

質問項目11ではT視覚特別支援学校とT大学の間に有意差が見られた。

質問項目12ではT視覚特別支援学校とT高校の間に有意差が見られた。

質問項目13ではT視覚特別支援学校とT大学の間に有意差が見られた。

質問項目15ではT高校とT大学の間に有意差が見られた。

表 1. 視覚障害者と健常者のアンケートの対応のないt検定の結果

質問項目	等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定				
	F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率 (両側)	平均値 の差	差の標 準誤差
1. ブラインドサッカーは楽しい	.845	.364	-1.468	36	.151	-.567	.386
2. また機会があればブラインドサッカーをやりたい	2.706	.109	-1.898	36	.066	-.750	.395
3. コミュニケーション能力が高まる	1.187	.283	.517	36	.608	.158	.306
4. 普段より声を出してコミュニケーションをとった	1.145	.292	-.152	36	.880	-.075	.495
5. ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった	.421	.521	-1.200	36	.238	-.483	.403
6. ブラインドサッカーは闘争心がわく	.667	.419	-2.191	36	.035 *	-.800	.365
7. 視覚(光・影)をよく使った	5.312	.027	-4.805	34.771	.000 *	-1.158	.241
8. 聴覚をよく使った	.816	.372	1.414	36	.166	.433	.307
9. 嗅覚をよく使った	3.972	.054	-2.572	36	.014 *	-.792	.308
10. 触覚をよく使った	.073	.789	.413	36	.682	.183	.444
11. 今までにない感覚を感じた	.157	.694	2.123	36	.041 *	.942	.444
12. ブラインドサッカーは体力的に疲れる	.004	.950	-3.126	36	.003 *	-1.258	.403
13. ブラインドサッカーは精神的に疲れる	1.334	.256	4.435	36	.000 *	1.450	.327
14. ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた	.080	.779	-.967	36	.340	-.325	.336
15. 障害者スポーツに興味を持った	.983	.328	-.527	36	.602	-.200	.380

仮定=等分散を仮定する。(項目7のみ等分散を仮定しない。)

*: $p < 0.05$

表 2. 視覚障害者と健常者のアンケートの平均値

質問項目	健常者 (N=30)	視覚障害 者(N=8)
1. ブラインドサッカーは楽しい	3.93	4.50
2. また機会があればブラインドサッカーをやりたい	4.00	4.75
3. コミュニケーション能力が高まる	4.53	4.38
4. 普段より声を出してコミュニケーションをとった	3.80	3.88
5. ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった	3.77	4.25
6. ブラインドサッカーは闘争心がわく	2.70	3.50 *
7. 視覚(光・影)をよく使った	1.97	3.13 *
8. 聴覚をよく使った	4.43	4.00
9. 嗅覚をよく使った	1.33	2.13 *
10. 触覚をよく使った	3.43	3.25
11. 今までにない感覚を感じた	4.07	3.13 *
12. ブラインドサッカーは体力的に疲れる	2.37	3.63 *
13. ブラインドサッカーは精神的に疲れる	4.20	2.75 *
14. ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなれた	3.80	4.13
15. 障害者スポーツに興味を持った	3.80	4.00

*: $p < 0.05$

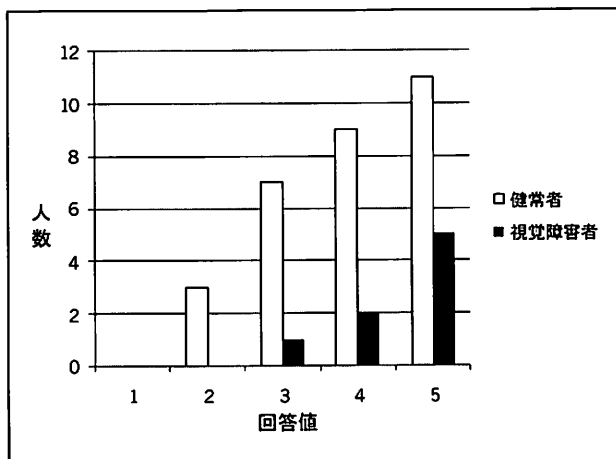


図 1. ブラインドサッカーは楽しい

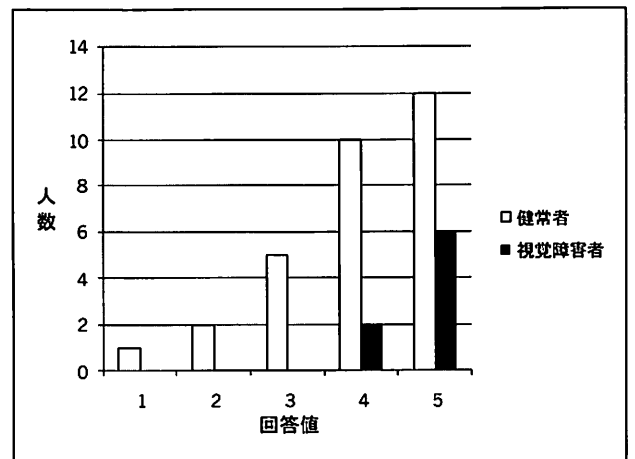


図 2. また機会があればブラインドサッカーをやりたい

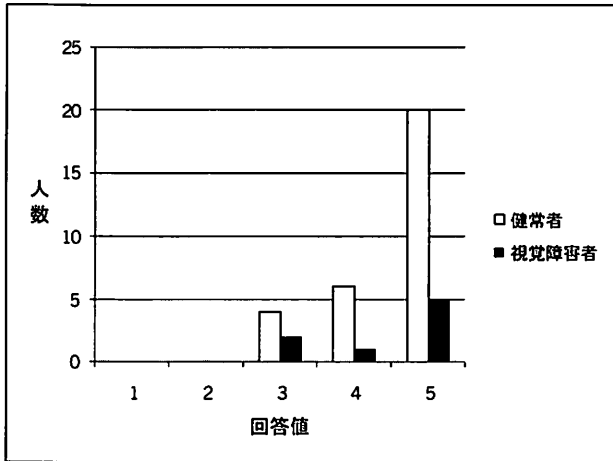


図3. コミュニケーション能力が高まる

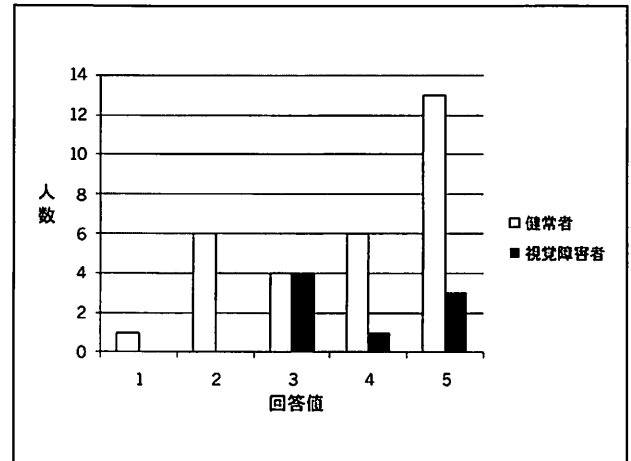


図4. 普段より声を出してコミュニケーションをとった

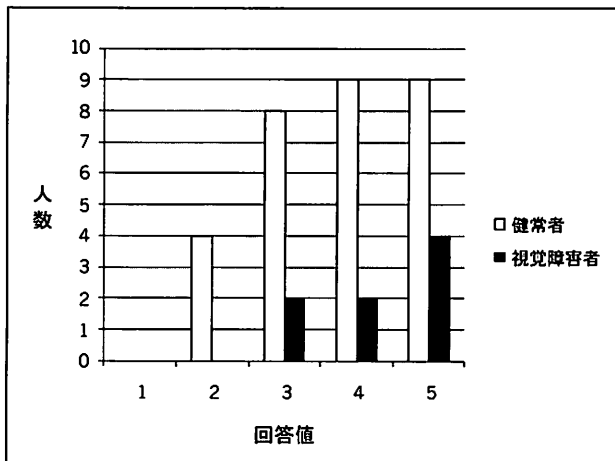


図5. ブラインドサッカーのプレーヤーの感覚がわかった

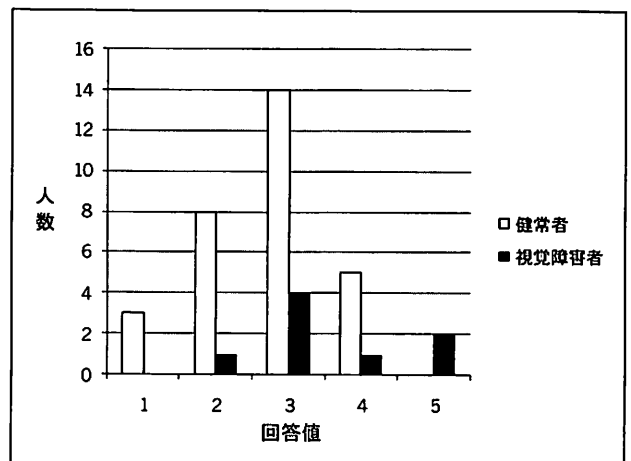


図6. ブラインドサッカーは闘争心がわく

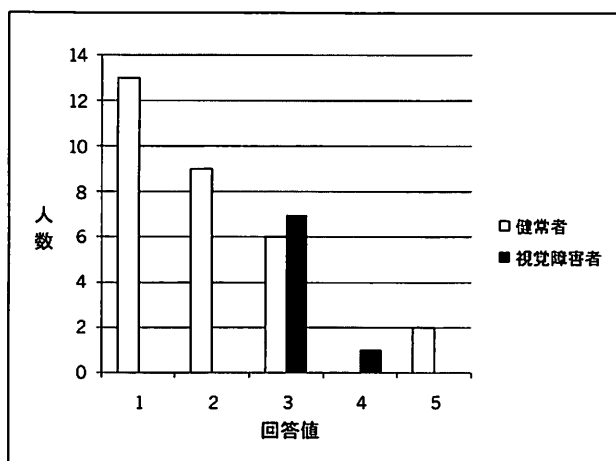


図7. 視覚(光・影)をよく使った

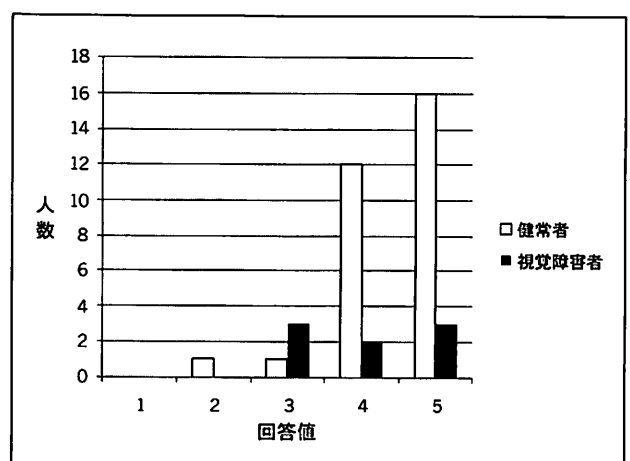


図8. 聴覚をよく使った

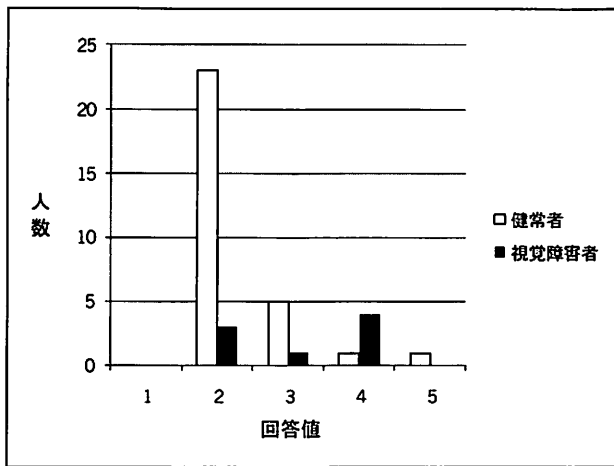


図 9. 嗅覚をよく使った

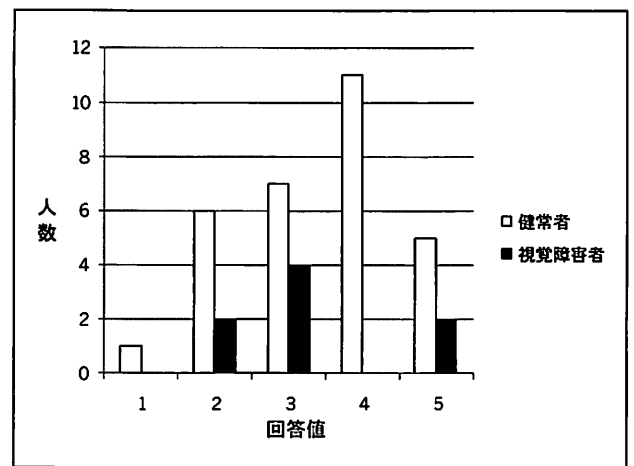


図 10. 触覚をよく使った

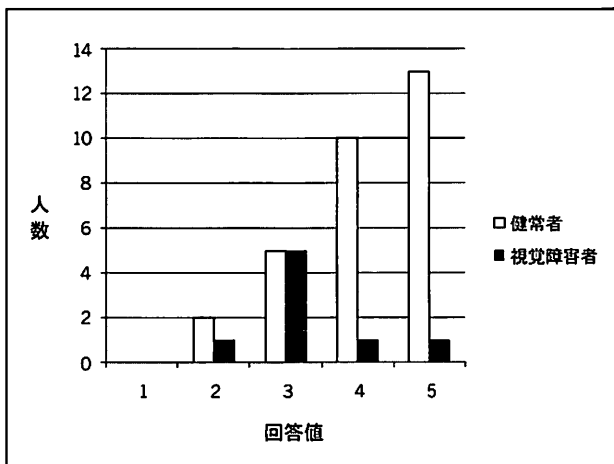


図 11. 今までにない感覚を感じた

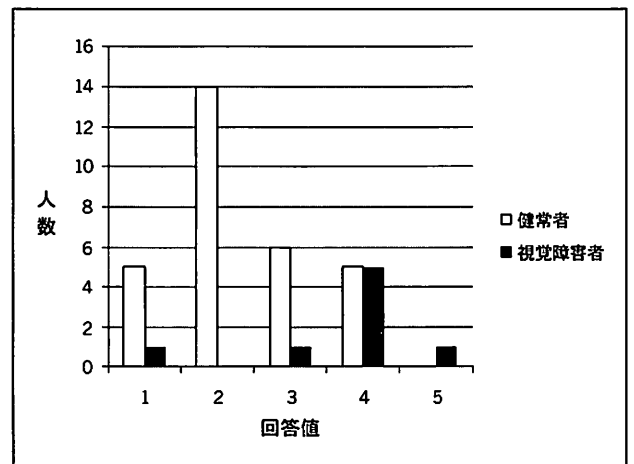


図 12. ブラインドサッカーは体力的に疲れる

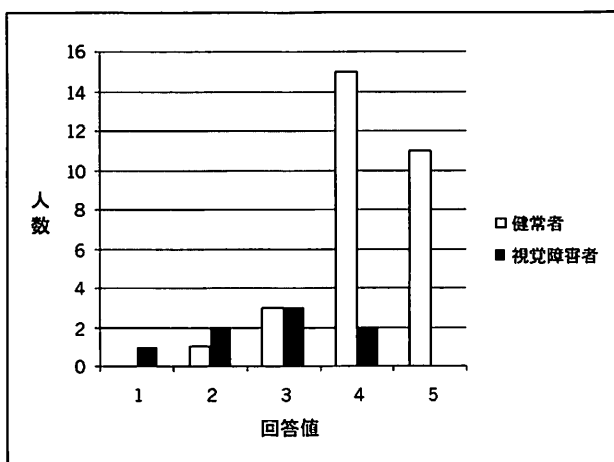


図 13. ブラインドサッカーは精神的に疲れる

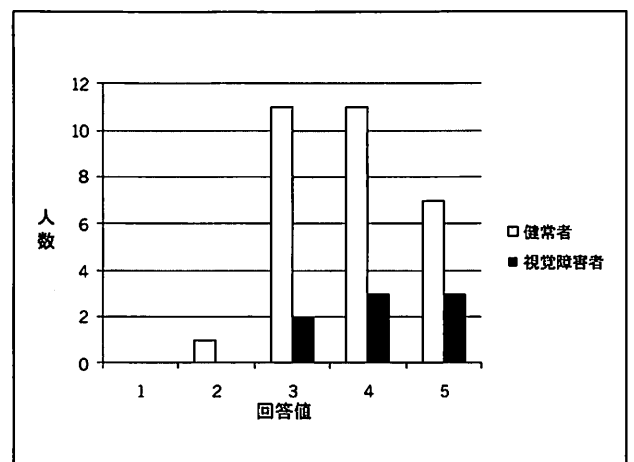


図 14. ブラインド、一般のプレーヤーそれぞれが仲良くなった

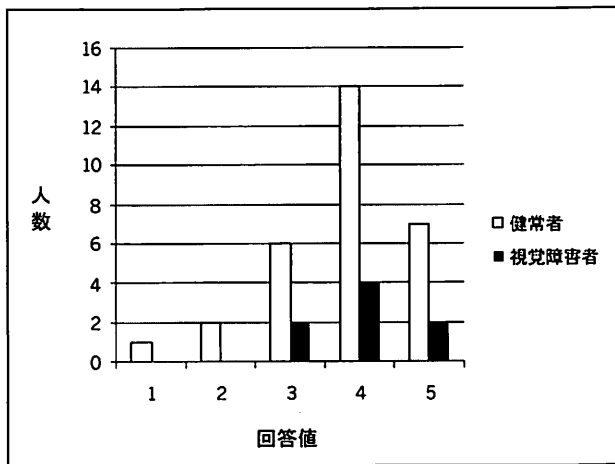


図 15. 障害者スポーツに興味を持った

表 3. 3 団体のアンケートの平均

質問項目	T大学 (N=20)	T高校 (N=10)	T視覚特別 支援学校 (N=8)	全体 (N=38)
1. ブラインドサッカーは楽しい	4.30	3.75	4.50	4.05
2. また機会があればブラインドサッカーをやりたい	4.50	3.75	4.75	4.16 *
3. コミュニケーション能力が高まる	4.60	4.50	4.38	4.50
4. 普段より声を出してコミュニケーションをとった	4.20	3.60	3.88	3.82
5. ブラインドサッカーのプレイヤーの感覚がわかった	4.10	3.60	4.25	3.87
6. ブラインドサッカーは闘争心がわく	2.90	2.60	3.50	2.87
7. 視覚(光・影)をよく使った	2.30	1.80	3.13	2.21 *
8. 聴覚をよく使った	4.80	4.25	4.00	4.34
9. 嗅覚をよく使った	1.40	1.30	2.13	1.50
10. 触覚をよく使った	3.70	3.30	3.25	3.39
11. 今までにない感覚を感じた	4.70	3.75	3.13	3.87 *
12. ブラインドサッカーは体力的に疲れる	2.80	2.15	3.63	2.63 *
13. ブラインドサッカーは精神的に疲れる	4.20	4.20	2.75	3.89 *
14. ブラインド、一般のプレイヤーそれぞれが仲良くなった	4.60	3.40	4.13	3.87
15. 障害者スポーツに興味を持った	4.40	3.50	4.00	3.84 *

*: $p < 0.05$

表 4. 質問項目 2. 「また機会があればブラインドサッカーをやりたい」についての Tukey の多重比較検定

所属	平均値の差	標準誤差	有意確率
T視覚特別支援学校 T大学	.250	.452	.845
T視覚特別支援学校 T高校	1.000	.398	.043 *
T高校 T大学	-.750	.369	.119

*: $p < 0.05$

表 5. 質問項目 7. 「視覚(光・影)をよく使った」についての Tukey の多重比較検定

所属	平均値の差	標準誤差	有意確率
T視覚特別支援学校 T大学	.825	.482	.215
T視覚特別支援学校 T高校	1.325	.425	.010 *
T高校 T大学	-.500	.394	.421

*: $p < 0.05$

表 6. 質問項目 11. 「今までにない感覚を感じた」についての Tukey の多重比較検定

所属	平均値の差	標準誤差	有意確率
T視覚特別支援学校 T大学	-1.575	.499	.009 *
T視覚特別支援学校 T高校	-.625	.440	.342
T高校 T大学	-.950	.407	.064

*: $p < 0.05$

表 7. 質問項目 12. 「ブラインドサッカーは体力的に疲れる」についての Tukey の多重比較検定

所属	平均値の差	標準誤差	有意確率
T視覚特別支援学校 T大学	.825	.468	.197
T視覚特別支援学校 T高校	1.475	.412	.003 *
T高校 T大学	-.650	.382	.219

*: $p < 0.05$

表 8. 質問項目 13. 「ブラインドサッカーは精神的に疲れる」についての Tukey の多重比較検定

所属	平均値の差	標準誤差	有意確率
T視覚特別支援学校 T大学	-1.450	.395	.002 *
T視覚特別支援学校 T高校	-1.450	.349	.001 *
T高校 T大学	.000	.323	1.000

*: $p < 0.05$

表 9. 質問項目 15. 「障害者スポーツに興味を持った」についての Tukey の多重比較検定

所属	平均値の差	標準誤差	有意確率
T視覚特別支援学校 T大学	-.400	.420	.611
T視覚特別支援学校 T高校	.500	.370	.377
T高校 T大学	-.900	.343	.033 *

*: $p < 0.05$

4 考察

4.1 質問項目値について

2群間の比較の結果、健常者は聴覚と触覚については視覚障害者よりもよく使ったと感じているが、視覚と臭覚については使っていないと感じている。

視覚障害者と健常者を比べ、視覚障害者はブラインドサッカーにより体力的に疲れは感じるが精神的な疲れは感じていない。また視覚障害者はブラインドサッカーにより闘争心が沸いている。健常者は目の見えない状態に慣れておらず、動くことができないためか、体力的には疲れないが、精神的に疲労し、闘争心は沸かない。また今までにない感覚を感じている。

視覚障害者と健常者の間でブラインドサッカーに対する感じ方は異なるが、両者ともブラインドサッカーは楽しい、また機会があればブラインドサッカーをやりたいと感じている。

また両者ともブラインド・一般のプレーヤーがそれぞれが仲良くなれた、障害者スポーツに興味を持った、コミュニケーション能力が高まると感じており交流を行うためにブラインドサッカーは適していると考えられる。

3群間の比較の結果、また機会があればブラインドサッカーをやりたいという項目についてはどちらも平均点は高いがT視覚特別支援学校とT高校との間に差があった。「視覚(光・影)をよく使った」についての項目値はT高校がT視覚特別支援学校に比べ視覚(光・影)をよく使っていないと感じていることがわかった。また「ブラインドサッカーは体力的に疲れる」についての項目値はT視覚特別支援学校が高いのに対し、T高校は低い。「ブラインドサッカーは精神的に疲れる」についての項目値はT視覚特別支援学校が低いのに対し、T大学、T高校の両者ともに高い。「今までにない感覚を感じた」についての項目値はT視覚特別支援学校に比較してT大学が高い。また「障害者スポーツに興味を持った」についての項目値はどちらも平均点は高いがT視覚特別支援学校とT高校との間に差があった。これらの3群間の分散分析よりT大学は健常者としてT高校と比較してより今までにない感覚や障害者スポーツの魅力に対して敏感であると示唆された。T高校はT大学より視覚等の感覚や体力を活かしきれていないと考えられる。これらはサッカーの経験や運動技能の差によりブラインドサッカーの感じ方が異なる可能性があることが考えられる。

5 結論

本研究ではT視覚特別支援学校とT大学、T高等学校の3校の交流を通して参加者がどのように感じるか検討し

た。アンケート調査の結果を健常者と視覚障害者の2群に分けて分析した結果、ブラインドサッカーをプレーするときには、使っている感覚や体力的疲労、精神的疲労の感じ方は2群間で異なっている。またアンケート調査の結果を所属団体別に3群にわけて分析した結果、健常者の2群間でもサッカー経験や運動技能の差により感覚や体力の使い方に差がある可能性がある。これより視覚以外の感覚を訓練することでサッカー技能や運動技能を向上させるトレーニングに発展できるとも考えられる。

視覚障害者と健常者の相互理解のためには、ブラインドサッカーが普及し誰もが楽しめるようになることは重要であると考えられる。ブラインドサッカーの普及、発展に本研究の参加者の感じ方を活かし共生社会の実現に役立てていきたい。

【参考文献】

1. 日本視覚障害者サッカー協会(2006) 視覚障害者サッカー競技規則. トライス; 兵庫, pp. 52-53.
2. 長澤由希・入口豊(2009) 視覚障害者サッカー (Blind Football) 現状と展望 (I). 大阪教育大学紀要, 第IV部門 第57巻 第2号: pp. 69-82.

連絡責任者

住所: 〒154-0001 世田谷区池尻4-7-1

筑波大学附属駒場中等学校

氏名: 横尾 智治

E-mail: yokoo.tomoharu.gf@un.tsukuba.ac.jp